月刊みんぱく

◉国立民族学博物館
2009
12
月号

昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
平成21年12月1日発行　第33巻第12号通巻第387号

特集◉占い

もくじ

1 エッセイ　世界へ◉世界から
虫の目線で撮りたい
栗林 慧

2 特集
占い
運を占い、人生を切り開く　中国のある人気占い師
…… 韓 敏
時を経た占い　古チベット語文献の解読
…… 西田 愛
コーヒーカップの底の「眼」
東地中海アラブ社会の占いと邪視
…… 菅瀬 晶子
占いに託す願い　イランの聖所信仰
…… 清水 直美
神聖暦に運勢をよむ　マヤのチッテー豆占い
…… 羽幹 昌弘

8 モノ・グラフ
「みんぱっく」でアイヌ文化理解をより深く
五月女 賢司

10 地球ミュージアム紀行
サンスクリティ博物館群
コレクターの熱意の賜物
三尾 稔

11 表紙モノ語り
占鈴
近藤 雅樹

12 みんぱくインフォメーション

14 追悼
和田祐一 民博名誉教授を偲ぶ
崎山 理
友枝啓泰 民博名誉教授を偲ぶ
藤井 龍彦

16 多文化をささえる人びと
日本を差別のない、多民族・多文化共生社会に!
藤井 幸之助

18 生きもの博物誌
イヌイットの暮らしを支える〈ワモンアザラシ〉
岸上 伸啓

20 歳時世相篇
綿畑の草取りと湯泉
真夏のオーストラリアから
松山 利夫

22 フィールドで考える
滑るようには、歩けない!
間瀬 朋子

24 みんぱくウィークエンド・サロン
研究者と話そう
次号予告・編集後記

エッセイ　世界へ◉世界から

虫の目線で撮りたい

栗林 慧（くりばやし さとし）

ファインダーをとおして昆虫たちとこれまで四〇年以上も付き合ってきたが、あるときそのファインダーの中の昆虫と対峙しながら、いつも自分は一方的に彼らの姿を追っているだけだが、昆虫たちの方はいったいどうゆうふうにこっちを見ているのだろう、彼らの目には周りの景色がどんなふうに見えているのだろう、と考えるようになった。そうしているうちに、そうだ、虫たちが見ていると思われるような写真をなんとか撮ってみたい、と思うようになった。それは、次のようなイメージの写真である。

たとえば牛や馬のような大きさのものを撮影する場合、ワイドレンズを使えば、ねらった被写体以外の遠くの景色などもはっきり分かるように写る。これと同様に、昆虫のような小さな被写体を写しても周りの景色がはっきり分かるような撮り方ができれば、虫の目線で撮った写真となるのではないだろうか。その思いはしだいに膨らんでいきつつも、既存のレンズではむろんそんな表現は不可能だ。カメラのレンズというのは、微小物体を撮影すると、どんなテクニックを駆使しても、その物体の前後はぼやけてしまうのが常識だからである。

今まで世の中に存在しないのなら、私がそんなレンズ作りに挑戦してみようという気持ちが沸き上がり、それからというもの、折にふれありとあらゆる光学機器、たとえばカメラだけでなく顕微鏡や望遠鏡を分解してレンズを取り出し、それらを組み合わせてみるという実験を繰り返してきた。しかし、ときにはイメージに近い像が得られるものの、とても実用にはならない。挑戦しては失敗するという繰り返しを何年も続けるうちに、ここ近年進歩著しい監視用ビデオカメラの超小型レンズを応用してみることを思いついた。そしてついに、それまで世界中のだれもが表現し得なかった写真撮影を可能にするレンズができあがった。

現在このレンズは、栗林が作ったレンズという意味でクリヴィジョンと呼ばれたり、虫の目レンズと言われたりしているが、このレンズによって撮影された虫たちは、その効果によって微小な生き物とは思えない迫力で迫ってくる。そのため、その写真やビデオは特に子供たちにとって大人気である。先日も、子供たちを集めた会で見せたところ、虫たちはなにを考えているのでしょうとか、なにを見ているのでしょうといった意見が出た。人々がこれまでの昆虫に向けていた気持ちが、わたしの写真によって少し変わったような気がして、なんとも嬉しい思いが込み上げてきた。

1939年生まれ。1969年よりフリーの生物生態写真家として活動を開始。2000年度科学技術映像祭で内閣総理大臣賞を受賞。2006年、科学写真の実績に贈られるレナート・ニルソン賞受賞。2008年、紫綬褒章受賞。写真展を多数開催するほか、写真集、幼児・児童向けの書籍、マルチメディアの出版及びテレビ番組の企画、撮影も手がける。URLは http://www5.ocn.ne.jp/~kuriken/

特集 占い

年の暮れは、一年の出来事を振り返る一方で、来年の運勢が気になる時期。日々の行動から人生の節目の重大な選択にいたるまでのさまざまな場面で、幸せを探求する手段として、人は占いに頼る。占いを担う人びと、占いの道具、占いのコスモロジーは千差万別でも、占いに託す思い、それを信じる心は人類に共通するのかもしれない

「文昌陣」で学問の気運を強める（中国）〈撮影・韓敏〉

占鈴が埋納されている鈴塚（蜂田神社）〈撮影・近藤雅樹〉

グアテマラの呪術師の持ち物。袋の中には占いにつかう豆が入っている〈撮影・羽幹昌弘〉

晴れて呪術師となり免状を渡す（グアテマラ）〈撮影・羽幹昌弘〉

イラン、テヘラン州シャフレ・レイ郡の聖廟〈撮影・清水直美〉

運を占い、人生を切り開く

中国のある人気占い師

韓敏（かん ぴん）
民博 民族社会研究部
専攻は文化人類学。二〇世紀の中国革命を歴史過程として、また文化システムとして研究している。近刊に『革命の実践と表象――現代中国への人類学的アプローチ』（編著書・風響社）がある。

中国人の人生観は現世利益の追求にある。すなわち、健康、出世、長生き、子孫繁栄、社会的地位と富の獲得に関心が強い。これらの利益がどれぐらい獲得できるかは、天によって与えられた宿命と、人間自身の努力、そして人間を取り囲む自然環境によって決まるとされる。

中国人が結婚相手、進学、昇進の難航、住宅・墓場の立地を考える際、占うのはそのためである。宣告された運命を、決してそのまま受け身的に待つのではなく、あの手やこの手を使いマイナスの運を避け、プラスの方向にもっていこうとする、前向きな生きざまがそこに見える。

◉王氏の銅銭占い

中国の占い方法は亀の甲羅を炙（あぶ）ってそのひび割れで予測する夏・商の時代の「卜（ぼく）」、蓍（き）草を用いて占う周の時代「筮（ぜい）」が有名だったが、現在、庶民に親しまれているのは、銅銭、人相、生年月日、羅針盤による占い法である。

安徽省宿州市（アンフィ ションスゥジュシ）に住む王維隆（ワンウイロン）氏は庶民的な占い法に精通する占い師の一人である。王氏に実際に見せてもらった銅銭による占いを紹介する。

依頼者は、まず三枚の銅銭を手に混ぜて、机に六回投げる。花模様のあるのは裏といい、陽を表し、文字のある面は表といい、陰を表す。占い師は下から上へ六回の陰の数を記録する。文字模様が一枚出た場合、「ㄧ」と書き、少陰とされ、二枚の場合「ㄧㄧ」と書いて少陽という。三枚の「陰」が出た場合、「×」と書いて老陰というが、これは陽に転じる。

銅銭を投げる前の依頼者〈撮影・謝景彩〉

依頼者の投げた銅銭の陰陽回数を記録する王維隆氏

王氏は六回の記録を見て、占いの依頼者と占われている当事者などの関係を明らかにし、総合的に判断し、結論を出す。

占いの結果に応じて、依頼者の自宅に符などを飾り、依頼者の置かれている凶方位の凶作用を吉作用に変えていく対策をとるケースもある。

その際に王氏がよくつかうのは「姜太公八卦鎮宅符（ジャンタイクオンバグァジェンザイフ）」である。姜太公とは商朝末期の政治家の姜子牙のことであり、災を払い、邪気を鎮める神とされている。

◉成事在天、謀事在人

今年六二歳の王氏は、一九七四年からなんと独学で『易経』を勉強しはじめた。彼は一九四七年に安徽省北部の農村に生まれ、一五歳のとき大飢饉があり、父が彼の足もとで餓死した。貧しかったが勉強がよくできた彼は特待生として宿州師範大学に入って数学を勉強した。卒業後、解放軍に入隊し、三年後に復員して宿州市中国銀行に就職したが、三回昇進のチャンスがあったにもかかわらず、結局うまくいかなかった。

納得がいかなかった彼に、ある年よりの同僚が『易経』という本は人びとの運命を予測し、幸せにしてくれると勧めてくれた。それ以来、三五年間、王氏は、占いの道に専念し、運を予測し、不利な時空を避け、自分にプラスになるように働きかけ、人生を切り開いた。

現在、北京、上海などの大都会からも公務員、軍人、医者、共産党幹部、商人などさまざまな依頼者が彼のもとに殺到している。

成事在天、謀事在人――事を成功させるのは天であるが、やるかどうかはあなた自身で。この中国のことわざがいうように、人間は、与えられた天命を左右することは不可能であるが、自分たちの工夫や、置かれている環境に手を加えることによって、運命をプラスの方向に転換することができる。これは中国庶民の生きる力だろう。

桃の木と鶏の血でできた姜太公八卦鎮宅符

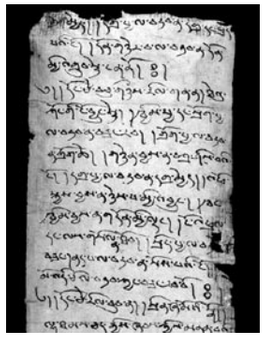
時を経た占い

古チベット語文献の解読

西田 愛（にしだ あい）
神戸市外国語大学大学院 博士課程
イギリス、フランスの国立図書館などに所蔵される古チベット語文献の解読・研究をしている。古文書の語る古代の占いと、現代チベット世界でおこなわれている占い・儀式との複合的な研究を目指す。

二〇世紀初頭にヨーロッパ、日本の各国探検隊が敦煌などから将来した古チベット語文献中には、占いの文書が多数含まれている。代表的なものとして、サイコロ占い、銅銭占い、烏の声による占い、羊骨占い、夢占い、日時に関する占いなどが挙げられる。

これらすべてに共通して言えることは、文書中に、誰が、いつ、どのように占っていたのかという客観的な情報がほとんど含まれていないことである。そこで、占い文書の前文や奥書、同時代の木簡からの情報、さらに周辺地域の占いとの比較をとおしてわかってきたことをいくつか紹介したい。


銅銭占い文書〈国際敦煌プロジェクト（IDP）データベース利用〉

羊骨占いに使用された羊の肩甲骨〈『シルクロード 絹と黄金の道』展図録より転載〉

◉サイコロ占い

まず、もっとも出土点数の多いサイコロ占い文書について。この占いに関する文書は、敦煌からだけではなく、その他のチベット支配地域（トゥルファン、マザルダーグ）などからも発見されており、九、一〇世紀のチベット社会で広くおこなわれていた占いであることが窺える。占いには、主に象牙製の細長い棒状のサイコロ（四つ目）を用い、それを三回ふることにより、一・一・一～四・四・四までの六四通りの結果を導きだしていたようである。

サイコロ占い文書の内容をみてみると、まずはサイコロの目の数（一・三・三など）が記され、それに続いて神格名または韻文が占いの出所として挙げられる。神格には明らかにチベット固有の神々と考えられるものからインド系の神々まで種々多様な名前が登場する。その後、病気、結婚、家運、生命運などについての個別の結果が述べられ、最後には大吉から大凶までの総合判断が下されているのである。

この点では、和歌や格言に続いて、個別の吉凶、総合的な吉凶の記された日本のおみくじと似ており、親近感を覚える占いである。これと似た占いとして、一二枚の銅銭を用いておこなう銅銭占いもある。

◉羊骨占い

この占いは、チベットだけではなく世界中で古くからおこなわれている占いの一種である。チベットでは、西域南道のミーラーン地域から占いに使われたと思われる羊の肩甲骨が多数出土している。時代的には七九〇～八五〇年頃のものであろう。

ほとんどが無地の卜骨（ぼっこつ）だが、一点だけ文字が記されたものがある。おそらく占いの効果、呪を強めるために記されたものであったと考えられる。

卜骨の中心部は欠損しているが、他の箇所に灼け跡などは見当たらない。おそらく熱した道具を骨の中心部に当て、それによって生じた亀裂の入り方から吉凶を判断したのだろう。

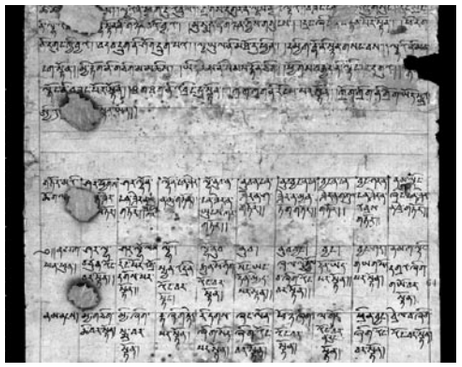
◉烏の声による占い

この占いは方角を九に、時間帯を一〇に区分し、どの方角でどの時刻に烏の鳴き声を聞いたかによって、なにが起こるかを予言したものである。たとえば、夜明けに南で声を聞けば、馬一頭が手に入る、といった具合である。

ほかに、各方角で不吉な鳴き声を聞いた場合の供養についても記されているのは興味深い。

＊

ここで挙げた古代チベットの占いはすべて、個人が先天的に生まれ持った性質による占い（四柱推命や占星術など）ではなく、その時々の事象に対処する比較的素朴な占いである。このあたりにチベット人の気質の一端が垣間見える。


烏の声占いの文書〈IDPデータベース利用〉

コーヒーカップの底の「眼」

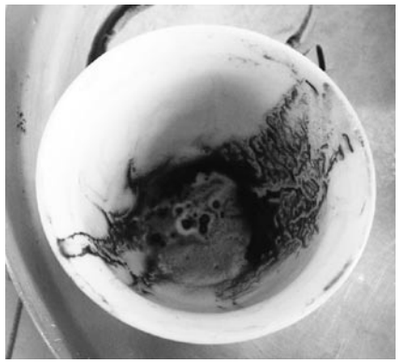
東地中海アラブ社会の占いと邪視

菅瀬 晶子（すがせ あきこ）
総合研究大学院大学葉山高等研究センター上級研究員
最近はパレスチナ・イスラエルの民間信仰や、ヨルダンの科学施設を調査中。著書に『イスラエルのアラブ人キリスト教徒』（溪水社）など。

かつてオスマン帝国治下にあった東地中海世界において、コーヒーといえばそれはトルコ・コーヒー。つまり細かく挽いたコーヒーをカルダモンとともに水で煮出し、その上澄みを小さなカップでゆっくり味わうものと決まっている。アラブ諸国ではアラブ・コーヒー、ギリシャやキプロスではギリシャ・コーヒーと呼ばれているが、基本的には同じものだ。

朝、眠い目をこじ開けるための起き抜けの一杯。午後、ひと仕事終えた後の一服。親しい友を歓待するにも、望まぬ客を早々と追い出すにも、コーヒーは欠かせない。そんなアラブ人の生活に密着したコーヒーは、古来占いの道具としても親しまれてきた。

今日の運勢は？


コーヒーを飲み終えて、しばらく伏せておくと、このような模様がカップの内側に浮かび上がる。「邪視」がいくつも浮き出ているのが、おわかりだろうか

◉コーヒー豆の滓（かす）がつくる模様

飲み終えたカップを盆の上に伏せて、しばらく放置すると、乾いたコーヒー豆の滓がカップの内側にさまざまな模様を描きだす。その模様を絵解きして、その日の運勢を占うのである。

カップのふちに向かって滓の線がのびて、その先が末広がりになっていたら、「道が開ける」。滓が入道雲のような輪郭を描いていたら、「お金が入る」。幾度も解説してもらったのだが、いまひとつよくわからない。

そんななかで、筆者にもはっきりと判別できるのが、他人から嫉妬を買っていることを示す「邪視」のサインである。コーヒーカップの底にカルダモンの粒が張りついて、そのまわりをコーヒー滓が黒くふちどっているのを見いだすと、彼らは「神様、どうかご加護を」と、神妙な顔で呟くのだ。

◉遊びなら許されても……

もっとも、一般のアラブ人がおこなうコーヒー占いは、新聞の星占いと同じく、運試し程度のものでしかない。プロの占い師もいるらしいのだが、わざわざ出かけていって鑑定してもらおうという気はないようだ。

それどころか、敬虔な一神教徒、つまりムスリムかキリスト教徒である彼らは、むしろそういった本格的な占いを敬遠しさえするのである。その証拠に、占い師から絵解きを習ったりするのかと尋ねると、彼らは一様に顔をこわばらせ、決まってこう答える。「カイロとかにはいるよ。でも、このあたりでは知らないね。それに、こうして遊び半分にやっているぶんには構わないけれど、占いなんてほんとうは、神の教えにそむくことだからね！」

◉ほんとうに怖い存在は

彼らが占いを恐れる理由は、コーヒーカップの底からこちらをじっと睨む、カルダモンの粒と無関係ではない。嫉妬のまなざしが災いを呼ぶという邪視にまつわる俗信は地中海沿岸全域でみられ、たいていどこにでも「邪視を発する」という評判の悪い人物がいるが、なかでも占い師の邪視は強力だとされている。

それだけではなく、占い師は客の注文に応じて、呪詛（じゅそ）もおこなうというのだ。折り合いの悪かった姑の死後、その部屋で寝起きするようになった娘が体調を崩し、思い切って部屋を調べたら、占い師が作った呪符がベッドの下から出てきたと、まことしやかに語る者もいる。

この地における一神教の影響力は絶大だが、その隙間には一神教以前の要素もいまだに根強く残っている。コーヒーカップの底の眼は、そのことを示す事例の一端といえるだろう。

コーヒーをわかす小さな手鍋と、コーヒーカップ

占いに託す願い

イランの聖所信仰

清水直美（しみずなおみ）
テヘラン大学外国語学部講師
イラン文学に見られる倫理観が本来の研究テーマ。この数年は、聖所信仰に関心をもち、調査している。

なにか新しいことをはじめるとき、進路に迷うとき、未来を知りたいと思うとき。「人を超えたもの」に答えを求めようとする行為に洋の東西はなく、イランでもさまざまな形で見られる。ここでは、イラン各地に見られる人を超えたものに触れ、祈る場である「聖所」に関連した占いをいくつか紹介してみたい。

◉聖なる場の特別な力

「聖所」とはイラン各地に見られ、人を超えた存在に関連した神聖な場所であり、そうした存在に対する訴えかけがおこなわれる場所である。病気を治してほしい、失せものを見つけてほしいなどの願掛けの場でもある聖所では、占いをおこなう人びとの姿も見られる。

そのひとつが、願い事を思いながら聖所の壁面にコインやモフル（シーア派信徒が礼拝に用いる土製の小さなブロックで、跪拝の際に額が当たるように床に置かれる）、小石などをこすりつけ、指を離してもそれらが壁から落ちなかったら願い事が叶う、というもの。各地で見られるこの占い、とくに決まった呼び名はないらしい。

岩窟の壁面での占いの跡。小石やモフルが多数貼りつけられている（ファールス州セイエド・モハンマド廟）

◉さまざまな願いをこめて

人は結婚し、子どもをもって一人前、とされるイランでは、結婚しても子どもが生まれないことは女性にとって大きな問題である。そこで女性たちはいつ子どもが授かるかを知ろうと聖所へ赴き、敷地内の木々にゆりかごの形に布の四隅を結びつけ、その中に短い木の棒や小石を入れていく。それが落ちたときに子どもができるとされている。

コルデスターン州ウーラーマーネ・タフトのピール・シャーリヤール廟の入り口脇にある石の上には、いくつもの小石が置かれている。これをざっと手に取り、数えてみる。手に取った小石の数が偶数か奇数かで望みが叶うかどうかわかるという。

岩窟には願い事を叶える力をもつとされる人物の墓とそれを覆うケースが置かれている。その奥の壁面で占いがおこなわれていた（セイエド・モハンマド廟）

占いに使われる小石にしても小枝にしても特別なものではなく、占い自体に名前もない。どこにでもあるものを、人知を超えた存在との交信の場である聖所で使用することに意味があるらしい。

◉宗教的な規制と相剋

しかし聖所信仰という、人びとの生活に密接な場所でおこなわれてきた占いは、一九七九年の革命後のイスラーム教育のなかで「クルアーン（コーラン）のなかで禁じられているから」、「非科学的な行為であるから」と、聖所の管理者らによって禁止されたり、自然とおこなわれなくなったりしている。こうした傾向は都市部やその周辺部で顕著である。

たとえば、テヘラン市北西部の山中にあるエマームザーデ・ダーヴードでは、参詣者がコインによる占いを盛んにおこなっていた。しかし五、六年前に廟の管理事務所により占いが禁止され、その後、廟内の拡張を口実に、占いに使われていた壁も撤去されてしまった。

一種のイスラーム・グローバリズムとも言えるが、不安を解消するための人びとのささやかな行為を規制する動きは少々寂しくも感じられる。

ハンモック状に結ばれた布の中に小枝や小石が置かれている。これが落ちたときに子どもが授かるとされている（コルデスターン州セイエド・エブラーヒーム廟）

神聖暦に運勢をよむ

マヤのチッテー豆占い

羽幹昌弘（うもとまさひろ）
写真家
写真展「大地礼讃」、「ある古都の一世紀」、「マリア・マリア」、「神の庭」などを開催。二〇一二年一二月二二日、マヤの長期暦が終わる。次はどのような時代がくるのかに関心がある。

それは一枚の印刷物がはじまりだった。ある町で街頭写真師と話し込んでいた時に渡されたものは、マヤの神聖暦ツォルキンに応じた誕生日を祝う儀式への招待状だった。

一九八〇年代初頭にカルロス・カスタネダ（ニューエイジの人びとに多大な影響を与えたアメリカの文化人類学者）の著作に接し、呪術師の精神世界を知りたいと思っていたが、なんと、その写真師が呪術師だった。誕生日の儀式に参加して、興味をいだいた私は、今後も儀式に参加させてくれるようお願いし、マヤの占いに出合うのである。

呪術師による水晶占い

◉神話にもある古来の占い

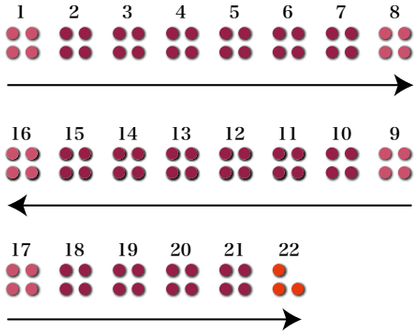
グアテマラの占いには、ツォルキンという神聖暦（一三の数と、雨・イヌ・サルといった名前のついた二〇の日を組合せ、二六〇日を一周期とする暦）に従った出生日によって、持って生まれた性格と一生の運勢・宿命を判断するものと、チッテー豆を使用し、近未来の金運・恋愛運・家庭運などを占うものがある。

他に水晶占いもある。これは水晶の割れ目の色を見て、緑色に見えた時は物事が成就しない、紫色に見えたならば家・土地・金・仕事が良い方向に向かう、灰色に見えたら死・敵と出会うだろう、などと占う。

私が手解（てほど）きを受けたチッテー豆占いは、マヤキチェ族の神話「ポップ・ウーフ」に記載されている古来のものである。この占いは、呪術師によって占い方の違いはあるが、基本的には、神聖暦ツォルキンを使用し吉凶の徴候を読みとり、未来を占う。

テーブルに広げた布の上で二六〇個の豆を左回しにかきまぜながら、マヤの神々の名を称えチッテー豆の精霊に正確な占いができるようお願いし、豆を一掴み握り二つに分ける。握ったほうの豆を四粒を一組とし、右に横一列に並べ八組作る。二列目も同じようにし、おおむね三列できる。最後の組の豆の数は四粒または三・二・一粒となるが、この最後の豆の組が最も重要なサインで、豆が偶数であれば吉。奇数ならば凶と判断する。

チッテー豆占いをしているところ。豆の数、並べ方など、その方法は占い師によってさまざまだ



神聖暦の日のあてはめ方例

◉占いの結果が最悪であれば

占いをする当日が神聖暦の何の日にあたるかをまず調べ、第一列目の最初の組にその日をあてはめる。

例えば当日が、「一の雨」ならば、右へ順に「二のイヌ」「三のサル」とあてはめていき、図のように、二列目は右から左に、三列目は左から右にすすみ、各列の端の組にあたった神聖暦の日の意味を読む。

この読み方は〈凵〉の形となり蛇を表す。マヤの神ククルカン（羽毛の蛇）のことだろうか？

占いの結果が最悪な場合は、依頼者が必要と思えば、呪術師に儀式をお願いし、良い方向へ導かれるよう祈る。

呪術師のイニシエーションの祈り

モノ・グラフ

「みんぱっく」でアイヌ文化理解をより深く

五月女（さおとめ）賢司（けんじ）
民博 機関研究員
専門は博物館学。特に、博物館における展示や教育活動のあり方や、地域における博物館のあり方について関心がある。

二〇〇九年春、貸出用の学習キット「みんぱっく」に「アイヌ文化にであう」が仲間入りした。そのなかには、北海道や樺太などで暮らすアイヌの人びとの伝統文化に関する、織り、編み、彫り、楽器、言葉、食事など、さまざまな観点から選ばれたモノが入っている。衣装や木彫品を手にとってみることができるほか、サケ、ヒグマ、エゾシカの肉や皮が食料や衣装などに利用されていたことを楽しみながら理解できるクイズボードや一筆書きでつながる美しい文様などに触れ、日本文化との違いを確認できる。

このようなアイヌ文化に直接触れることにより、大自然のなかで神（カムイ）とともに生きてきたアイヌの知恵や伝統をより多くの人に知ってもらいたいという願いが込められている。

製作スタッフの感動を包みこんで

このパックは、民博の佐々木利和教授と情報管理施設の棚橋緑さんが中心となって製作した。製作の前には、アイヌ文化の研究や振興などを担う諸機関で、さまざまな資料や体験学習プログラムの調査をおこなった。北海道ウタリ協会（現・北海道アイヌ協会）白老支部主催の「平成二〇年度イオル再生事業体験交流事業」にも参加し、アイヌの伝承地であるウヨロ川河川敷で伝統的なマレㇰ漁や投網漁などのサケ漁、クチャ（仮小屋）製作、伝統食材の試食などを体験した。

北海道でのマレㇰ漁の体験学習の様子

棚橋さんは「命をいただく」ことへの感謝の気持ちや、自然と一体となって生活していたアイヌ文化をより深く理解することができたと語っている。このような現地体験から得た感動が、このパックの製作にも生かされたといえるだろう。

アイヌは日本の先住民族

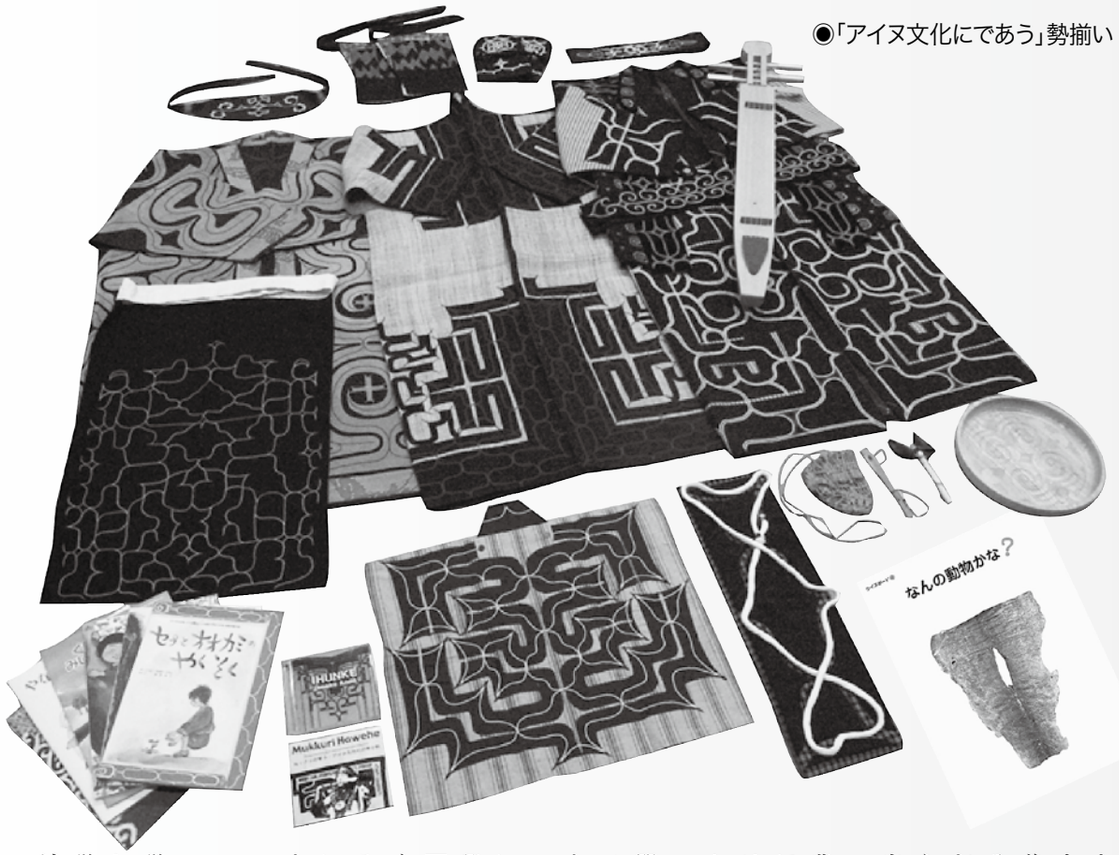
アイヌをめぐる最近の動きとしては、二〇〇七年九月の国連総会で「先住民族の権利に関する国際連合宣言」が採択されたことが大きい。これを受け、翌年六月には衆参両院本会議が全会一致でアイヌを日本の先住民族と認める決議を採択、政府はこの決議にもとづいてアイヌ有識者懇談会を設置した。

この懇談会は二〇〇九年七月にまとめた報告書で、アイヌの歴史や文化についての教育が義務教育段階においても十分実施されていないことなどを指摘している。そのうえで、指導方法についての研究とその研究成果の教育現場への還元、次回の学習指導要領の改訂、短期的には教職員などへの研修の充実と体験学習等の積極的な取組の促進など、幅広い対応を求めている。

一時間の体験でも学習効果が

このような流れのなかで、唯一の国立の民族学博物館である民博の果たす役割は大きい。「アイヌ文化にであう」は運用がはじまってから、すでに多くの小中学校で活用いただいているが、そのうちの一校、豊中市立大池小学校で活用方法に関する調査をおこなった。

同校では、異文化に触れ自分たちの文化との違いについて考えるために、四年生三クラス一一七人が各一時間で「アイヌ文化にであう」を活用した。まず、北海道にはアイヌ語の地名がたくさんあること、アイヌは昔から北海道に住み、独自の文化を築いてきたことなど、アイヌに関する基本を学んだ。次に、衣装の試着をするなど、実際にモノに触れ、その感触や重量感、匂いや着心地などを確かめた。最後には、「ふりかえり」や発表をおこない、とても充実した体験学習であった。



◉「アイヌ文化にであう」勢揃い

授業開始時、「アイヌ」という言葉を知っている児童はクラスに二人ほどだけだったが、授業の終わりには半数以上がアイヌ文化のことがわかったと挙手した。

このことから、一時間という短時間でもアイヌ文化に関する話を聞き、モノに触れることによる学習効果があったといえるのかもしれない。

児童達は衣装を試着した別の児童に「似合う！」、「かっこいい！」と興奮気味に声をかけたり、最後には「同じ日本のなかなのに、文化がたくさんあって不思議」と話したりするなど、このパックを活用することによって、アイヌ文化への理解が深まったようだ。

「みんぱっく」のあらたな可能性

小学校では二〇一一年度から、中学校ではその翌年度から完全実施される新学習指導要領では、「総合的学習の時間」の授業時数が大幅に削減されている。

今年度からは新学習指導要領への移行がすでにはじまっており、小中学校が総合学習の枠で民博や民博の資源を活用することは少なくなるのではないだろうか。総合学習から削減された時間が各教科に戻り、小学五・六年生には外国語活動があらたに加わるなかで、「アイヌ文化にであう」などの「みんぱっく」の活用のされ方も今後あらたな展開をみせていくだろう。

異文化を理解することの重要性がますます高まってきているいま、新しい授業の枠組みにおいても児童生徒によりよい学びがもたらされるよう、学校の民博利用に関する研究をさらに進めていきたい。

クイズボード「なんの動物かな？」

サンスクリティ博物館群／インド・ニューデリー

コレクターの熱意の賜物

「土器」、「日用工芸品」、「織物」の三つの博物館からなる総合的な工芸博物館は、インド各地の日常の暮らしを伝えつつ、衰退する伝統工芸の継承を目指す

土器博物館。州ごとの特徴がわかる

コテージと野外劇場。芸能公演も可能

博物館群の入口。素焼の馬がお出迎え

インドの博物館は国立や公立のものより私的な財団が設立・運営しているもののほうが断然個性的で興味深い。ニューデリーの郊外にひっそりと建つサンスクリティ博物館群もその一例である。この博物館群は、公益法人「サンスクリティ財団」の本拠である緑豊かなセンターの中にある。

日用品の技と美

「サンスクリティ」はヒンディー語で一般に文化を意味する。財団はインドの伝統的な手工芸文化の保護や振興を目的に多彩な活動を続けており、博物館群はそれに見合うように「土器」、「日用工芸品」、「織物」の三つの博物館からなっている。

一つ一つの博物館はさほど大きくないが、生活に根ざした技と美がわかる品々をシンプルに展示しており、訪れた者を飽きさせない。

その特徴をよく表しているのが日用工芸品博物館である。ここには家庭の祭壇に祭る神像からはじまって、筆記用具、煙草を吸う道具、台所用品、壺類、クシと化粧道具、玩具など全部で一七のコーナーを設けている。多様な日用品の展示をとおして、インドの人びとの日常の暮らしを伝えている。

各コーナーには、さまざまな地域から集められたコレクションが展示されているので、類似の日用品の地域差もわかる仕組みである。人びとの日用品への愛着や職人の丹念な仕事ぶりが伝わってくる。日用品だけをこれほど多数展示している博物館は、インドではあまり見当たらない。

個人コレクションの博物館

この博物館の展示品は、もとはデリー在住のある裕福な商人の個人コレクションだった。彼は若いころからインドの工芸品の美しさに魅せられ、商用で訪れる先々でコレクションを進めてきたという。

やがて彼の熱意と優れた鑑賞眼は他のコレクターや研究者の知るところとなった。そういった周囲のすすめもあって彼は今から二〇年ほど前に私財を投じて財団をつくり、博物館を設立した。開館や館の運営にはこれらの研究者や友人たちも積極的に協力している。

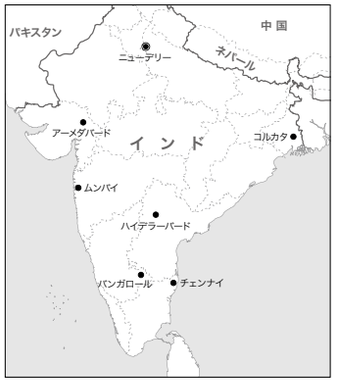
こうしてインドでは珍しい総合的な工芸博物館が誕生したのである。

伝統工芸の新たな継承へ

サンスクリティ財団は、工芸の担い手の保護や育成にも熱心だ。毎年各分野の優れた職人に奨励賞を授与するほか、インド内外から職人やアーティストを招いてワークショップを開き、技術の国際交流もおこなっている。センター内にある瀟洒（しょうしゃ）なコテージは、ワークショップ参加者が寝食をともにしながら交流できる場でもある。

財団は最近、子どもたちへの教育にも力を入れ、伝統工芸への理解を広げようとしている。カースト間で異なる職業の技には互いに無関心だったうえ、祭司や武人、農民に比べると手工芸職人の地位が低かったインドでは、このような試みはとても新しい。

一コレクターの熱意からはじまった博物館は、経済発展のかげで衰退が目立つ伝統工芸をあらたなかたちで継承させる拠点にもなっている。



女性用のクシと髪飾りの展示

三尾 稔（みおみのる）
民博 研究戦略センター
インド西部を主なフィールドにして、宗教と文化の動態をテーマに研究している。最近は民衆文化と信仰の関係や、その継承と変化に関心がある。

表紙モノ語り

占鈴

地域：日本　大阪
1985年受入（津村重一土鈴コレクションの一部）
標本番号H0142428～0142439

近藤雅樹（こんどうまさき）
民博 民族文化研究部

専門は、民俗学・民具研究。現在は、渋沢敬三の業績と、彼が開設したアチック・ミューゼアムの活動を中心に調査中。

これら一二個は、蜂田神社（大阪府堺市）から授与される土鈴のかずかず。式内社である同社には、古来、鈴占神事という秘儀が伝えられてきた。節分の未明、冷気の中に響く鈴音が神秘的であるという。これは、三世紀前半に活躍した呉王孫権の末裔と称する蜂田連が製し奉納する土鈴一二個の音色によって、年中の吉凶を占う神事である。神事の後、鈴は木槌で砕かれて境内の鈴塚に埋納されていた。しかし、昭和四年以来、当日の参拝者たちに籤（くじ）を引かせて授与するようになった。社伝には、そう記されている。別に開運厄除けの土鈴も授けるようになった。

音による占いとしては、岡山市吉備津（きびつ）に鎮座する吉備津神社「鳴釜（なるかま）神事」がよく知られている。これらは、古代の王権による統治が整備される以前におこなわれていた呪術の名残だと考えられる。

「鈴扇舞」という巫女舞がある。拝殿の賽銭箱と太綱に取りつけられた大きな鈴は、神社に必須のアイテムである。鈴や太鼓は、神との交信に不可欠な道具。だから、鈴音の響きに神意を読みとろうとした。

とはいえ、なぜか、鈴占をおこなう神社は珍しい。一年の吉凶・豊凶を占う神事としてもっとも一般的になったのは、粥占である。竹管内の白粥または小豆粥の量と、姿によって、種々の農作物や漁獲を占うのである。そして、粥占もまた、未明におこなわれる秘儀である。

新春の神事に小豆は欠かせない。蜂田神社の鈴占神事に際しても、参拝者たちに温かい善哉が振るまわれる。その本来の目的は、寒気をしのぐことにあったのではない。粥占にともない奉納された脇役の鈴にばかり気をうばわれて、いつしか主副が転倒してしまったのだろう。そして、神社名も「泉州鈴の宮」という俗称のほうが知れわたるようになった。

〈訂正〉11月号「表紙モノ語り」で「代親布」の標本番号と掲載データベース名に誤りがありました。正しい標本番号は「H0161405」で、資料名「コマケンドョー」が掲載されているデータベースは、標本資料詳細情報データベースです。訂正してお詫びいたします。

特別展

「自然のこえ 命のかたち ―カナダ先住民の生みだす美」

会期　一二月八日(火)まで
会場　特別展示場
※研究者によるギャラリートークをおこないます。
日時　一二月五日(土)
時間　一三時三〇分～一四時
　　一五時～一五時三〇分

年末年始展示イベント「とら」

みんぱく収蔵の資料や世界各地の「とら」に関する情報を映像・パネルなどを使ってご紹介します。
会期　一二月一七日(木)～二月二日(火)
場所　常設展示場内

春のみんぱくフォーラム 二〇一〇年 西アジア 再発見関連イベント

◆大村次郷写真展「西アジア、祈りの風景」
会期　一月八日(金)～三月三〇日(火)
場所　本館一階エントランス

◆「じゅうたんをつくろう!」
みんなで一枚のじゅうたんをつくります。織機をつくるところから仕上げまで、すべての工程をワークショップ形式でおこないます。
①「織機をつくろう!」
実施日　一月一七日(日)
時間　一〇時三〇分～
会場　本館一階エントランス
定員　一五名(事前申込制)
実費　五〇円
※対象は小学一年生からです。
②「じゅうたんを織ろう!」
実施日　一月一九日(火)～三月二七日(土)までの火・木・土・日・祝日
時間　一一時～一二時と、一三時～一六時の間、随時
会場　本館一階エントランス
※申込不要。参加は無料です。
お申し込み・お問い合わせ
情報企画課情報企画係
電話　〇六―六八七八―八五三一(平日九時～一七時)

◆みんぱく映画会 特別展関連「極北の怪異(極北のナヌーク)」

実施日　一二月六日(日)
時間　一三時三〇分～一五時三〇分(開場一三時)
会場　講堂
定員　四五〇名(当日先着順)
参加費　無料
お問い合わせ
広報企画室企画連携係
電話　〇六―六八七八―八二一〇(平日九時～一七時)

●音楽展示・言語展示を改修のため閉鎖しています
期間　三月一六日(火)まで(予定)

●休館日・無料観覧日のお知らせ
年末年始は一二月二八日(月)から一月四日(月)まで休館します。
一月一一日(月・祝)成人の日は、常設展を無料で観覧いただけます。ただし、自然文化園を通行される場合は、入園料が必要です。

＊詳細については、みんぱくホームページをご覧ください。

刊行物紹介

■園田直子　編
『紙と本の保存科学』
岩田書院
定価：2,940円(税込)
本書は、紙や本をより良く理解し、その保存に役立ててもらうことを目的にしています。図書館や文書館等で紙資料の保存に携わる人が必要とする情報をまとめた書として、司書をめざす学生の基礎読本として、そのいずれにしても対応できるよう書かれています。

■小長谷有紀　責任編集
『民博通信』2009 No.125
特集　経験された社会主義

■梅棹忠夫・及川昭史・松原正毅　編
『梅棹忠夫著作目録(1934-2008)』
(国立民族博物館調査報告No.86)

ビデオテーク新番組表(7月23日よりビデオテークに新番組がくわわりました)

番組番号	番組タイトル	再生時間	監修者	地域	番組の種類
1688	南インド　ヒンドゥーの結婚式	29分	寺田吉孝	南アジア	短編番組
1689	バタックのタイコとリズム　インドネシア・スマトラ島	19分	福岡正太	東南アジア	短編番組
1690	バレンシアの聖母マリア誕生祭と管楽器ドゥルサイナ	22分	寺田吉孝、笹原亮二、ロベルト・ガルフィアス	ヨーロッパ	短編番組
1691	トルコのお菓子ヘルヴァ	15分	寺田吉孝	西アジア	短編番組
1692	トルコの管楽器ズルナ	33分	寺田吉孝	西アジア	短編番組
1693	北タイの精霊ダンス　ピー・メン	26分	田辺繁治	東南アジア	短編番組
1694	クリンタン　フィリピン・ミンダナオ島のゴング音楽	22分	寺田吉孝	東南アジア	短編番組
1695	トンパ文字　中国雲南省ナシ族の文字	20分	横山廣子	中国地域	短編番組
1696	雲南省ナシ族の農民画家　張春亭	24分	横山廣子	中国地域	短編番組
1697	こんぶ漁　北海道・えりも町目黒の日高昆布	20分	飯田卓	日本	短編番組
3686	Basavanna　The Folk Cow Theater of South India	34分	Yoshitaka Terada	南アジア	短編・英語番組
7206	祖霊になる　北タイの「ピー・メン」ダンス	39分	田辺繁治	東南アジア	長編番組
7209	ペー族の葬送儀礼	62分	横山廣子	中国地域	長編番組
7210	ナシ族の宗教的職能者　トンパ	54分	横山廣子	中国地域	長編番組
7211	こんぶ漁　北海道・えりも町目黒の日高昆布	57分	飯田卓	日本	長編番組
7212	Samir Kurtov　A Zurna Player from Bulgaria	38分	Yoshitaka Terada	ヨーロッパ	長編・英語番組
7213	Виртуозът на зурната　българинът Самир Куртев	39分	寺田吉孝	ヨーロッパ	長編・ブルガリア語番組

友の会

友の会講演会

会場●国立民族学博物館 第5セミナー室
定員●96名
(当日先着順、会員証をご提示ください)

第379回　2010年1月9日(土)
時間●14:00～15:30(13:30開場)
アラブからみたヨーロッパ
講師　西尾哲夫(民族文化研究部教授)
ヨーロッパの人びとが「オリエント」をどのように見ているかという視点についてはこれまでも語られてきましたが、その逆の立場から語られることはあまりありませんでした。アラブ、イスラム世界からヨーロッパはどのように見えているのかについてお話しします。

第380回　2010年2月6日(土)
時間●14:00～15:30(13:30開場)
ガンディーの大英帝国
講師　杉本良男(民族社会研究部教授)

東京講演会

会場●JICA地球ひろばセミナールーム202
定員●40名(事前申込要)

第90回　2010年1月17日(日)
時間●14:00～15:30(13:30開場)
先住民の現在を読み解く(1)
アフリカの狩猟採集民の事例から
講師　池谷和信(民族社会研究部教授)
国際的に先住民としての「権利」が認められる潮流の中で、比較的穏やかに「権利」を獲得していく場合と国際政治をも揺るがすような問題にまで発展する場合とがあります。各民族の生業形態や社会システムに着目して考えます。

第91回　2010年2月28日(日)
時間●14:00～15:30(13:30開場)
先住民の現在を読み解く(2)
先住民としての「権利」獲得とその後
講師　松山利夫(民族文化研究部教授)

国立民族学博物館 友の会
電話　06-6877-8893　ファックス　06-6878-3716
電話でのお問い合わせは月曜～金曜日9時から17時までにお願いします。
http://www.senri-f.or.jp/　E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

ミュージアム・ショップ

ユーモア溢れるサンタクロース

12月、ミュージアム・ショップでは恒例クリスマス・フェアを開催しております。「おもちゃの里」として名高いドイツ山間の村、ザイフェンより、温かみあふれる木工品の数々が、ショップに届きました。
クリスマスをモチーフにした木製のオーナメントや、伝統的な技術を用いてマイスターが生みだす、木目の美しい「ツリーを持つサンタ」など、個性溢れるサンタクロースがみなさんのご来店をお待ちしております。

サンタクロースのオーナメント(945円～)、ケーラー社「ツリーを持つサンタ」(5,534円～)

国立民族学博物館 ミュージアム・ショップ
電話　06-6876-3112
ファックス　06-6876-0875
水曜日定休
ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/
E-mail shop@senri-f.or.jp

友の会会員のみなさま、今年一年の感謝をこめて、12月25日まで20%割引をおこなっております。
(ご来店時のみ。書籍など一部は対象外)

みんぱくゼミナール

会場　国立民族学博物館 講堂
時間　13:30～15:00 (13:00開場)
定員 450名 (当日先着順)
参加費　無料
展示場をご覧になる方は、観覧料が必要です。

第379回　12月19日(土)
被災地が育む新たな絆
講師　太田敏一(神戸とニューオリンズのジャズ交流実行委員会事務局／神戸市職員)、
林 勲男(民族社会研究部准教授)
兵庫県南部地震(1995年1月)と新潟県中越地震(2004年10月)のそれぞれの被災地では、被災という経験からの教訓の発信に留まらず、新たな地域間交流が生まれています。被災地の復興、被災者の生活再建にとって、こうした地域間交流のもつ意味について考えます。

第380回　2010年1月16日(土)
対談 **アレクサンドロスの道を撮る ―写真家、大村次郷×山中由里子**
講師　大村次郷(写真家)、
山中由里子(民族文化研究部准教授)
アジア各地を隈なく写真に撮り続ける大村次郷氏との対談。大村氏のライフワークの一つはアレクサンドロス大王の足跡を追い、写真に撮ることです。大王の東方遠征の行程を写真で辿りながら、大村氏が現地での体験を語り、アレクサンドロス伝説を研究する当館准教授・山中由里子が各地にまつわる逸話や伝承などを紹介します。

アレクサンドロス象牙彫刻
タジキスタン国立博物館所蔵　大村次郷撮影

和田祐一 民博名誉教授を偲ぶ

二〇〇九年三月二〇日ご逝去　享年八二歳

崎山 理（さきやま おさむ）　民博 名誉教授

和田祐一（わだゆういち）先生は、一九七四年、民博創設と同時に着任され、言語展示の企画と設計の責任者として大きな仕事をされた。文字なら分かりやすいが、言葉をいかに「展示」するか、先生の考案された言語装置はこれまでずっと来館者の注目を集めてきた。事実、世界の「民族博物館」で言語地図や文字ならともかく、民博のような言語展示があるのを私は知らない。

開館当初の語順装置は、最近まで駅や空港で行き先や時刻の案内に使われていた表示板式であった。一九あるどれかひとつの言語のボタンを押すと、「少年は父に手紙を出した」という文の四要素の書かれた板がパタパタとめくれて所定の位置で止まる。ただし、この装置は十数年後に改修され四要素の書かれた箱がコトコトと導線を並行移動するものになり、言語数も三一と増えた。

現在は撤去された発音装置には唇、舌、喉ひこを動かすための巧妙な仕掛けが工夫されていた。これら装置は、大変機械好きであった先生のアイデアから生まれたのである。

しかし、このようなメカニカルな装置は頻繁なアクセスで故障が多かったことも事実である。一九九〇年、先生のご退官後、第七展示棟増設の折に言語チームも言語展示を見直し、語順装置をコンピュータ制御による大型の電光パネルに変えた。文例も「おばあさんは子どもに昔話を語った」に改め、言語数は一挙に九六に増やした。

一九九六年、新展示棟の竣工式に出席された先生が新装置をご覧になったとき、私は文例を変えたことを気にしていたのだが、最初に口にされたのは、「語順が現れるのがパッパッと速すぎ自分で考えている間がない」であった。確かに、パタパタ、コトコト式より瞬間的に語順が表示される。私は返す言葉がなかった。先生は、博物館はモノを見て考えるところ、という立場に徹しておられたのである。

和田先生のご出身は言語学ではなくフランス文学であったが、京都人類学研究会（通称、近衛ロンド）で人類学的分析に基づく言語研究の方法を究められたご経験が長い。先生はいつも物静かで若造の話にも批判めいたことは言われなかったが、独特の苦笑いは「それは困るな」というリスポンスであった。

ただ一度、民博の特別研究「日本民族文化の源流の比較研究」シンポジウムで、一九八六年、私が受け持った「日本語の形成」に先生のご参加もお願いしたところ、そのようなことは自分が去ってからにしてもらいたい、というにべもないお返事であった。日本語系統論者にしばしば見られるデスマッチに関わることを警戒されたのだと思う。私は国内外からの参加者や発表内容を説明し、ようやく納得され座長も承諾してくださった。このシンポジウムは成功裡に終了し、報告書も刊行されている。

ご自身による蝶の採集とコレクションは趣味というよりプロ級であったようだ。時どき、どこそこでオークションがある、と言っておられた。

先生は本年三月、享年八二歳で鬼籍に入られたが、梅棹忠夫顧問に知らされたのは五月になってからで、われわれが訃報に接したのはさらにその後である。まことに静かな逝かれかたであった。今は胡蝶となり翩翩然（くくぜん）（楽しく）と天を飛んでおられることであろう。

ご冥福を心からお祈りします。

新着図書を前にした和田祐一先生

追悼

友枝啓泰 民博名誉教授を偲ぶ

二〇〇九年八月二七日ご逝去　享年七三歳

藤井 龍彦（ふじい たつひこ）　民博 名誉教授

本年（二〇〇九年）九月二、三の両日、名古屋の南山大学において「日本ペルー民族学研究五〇周年記念事業：日本とペルーの媒介者たち」という研究集会がおこなわれた。昨年は、第一次の東京大学アンデス地帯学術調査がおこなわれてから五〇年ということで、東京やペルーのリマで大規模な催し物がおこなわれた。

さらに今年は、一九五九年に当時東京大学文化人類学教室の大学院生であった佐藤（当時は三浦）信行氏が、クスコ近郊のチンチェロで住み込み調査をされてから五〇年にあたる年であった。この催しの発案者が友枝啓泰（ともえだひろやす）さんであったが、残念ながら彼の姿はそこになかった。

集会は二人のペルー人（歴史学者と画家）と約二〇名の日本人の民族学研究者が集まるという、かつてない規模のものであった。加えて会場の壁面には、友枝さんの、四〇年以上にわたったペルーでのフィールドの写真が展示された。東大大学院の木村秀雄さんによる基調講演「日本における民族学五〇年」はもちろん、その他の報告の随所に、友枝さんの思い出がちりばめられ、期せずして友枝さんをしのぶ会の様相を示すことになったのは当然であろう。

思い起こせば、友枝さんとは長いお付き合いであった。一九六六年、横浜からペルーの首都リマの外港カリャオへの長い航海の後、埠頭で出迎えていただいたのが最初であったのだから、四〇年以上になる。

その後の三カ月にわたるワヌコでの発掘生活が終わり、友枝さんは石田英一郎教授により新設された埼玉大学の文化人類学教室に赴任された。その後しばらくは、友枝さんの関心がアンデスからアマゾンに移っていたこともあり、お目にかかる機会もなかった。

一九七四年に民博が創設され、わたしも第四研究部（担当アメリカ地域）の一員として新規に採用された。数年後――たぶん一九七六年だったと思うが、友枝さんが民博にこられると聞いたときは、展示場の一般公開を控えていたこともあり、大いに勇気づけられたことを思いだす。

それ以来、展示のみならず、共同研究、現地調査などのあらゆる機会を通じて、友枝さんにはいろいろと教えていただいた。

友枝さんの思い出は限りないが、いちばん印象に残っているのは蝶の採集である。いつの調査のときであったかはっきりと覚えてはいないが、当時民博で蝶の収集家として知られていた和田祐一さんの教えを請い、採集用具一式をもってアンデスへ行ったことがある。「なぜ蝶を?」と伺うと、「アンデスの高山蝶はけっこう良い値段がするので、高地の農民に蝶をとらせれば彼らの収入になる」というのである。一時が万事。友枝さんにとっての中央アンデスは、単なるフィールドではなく、あたかも自分の親戚のように感じていたのであろう。

友枝さんがフィールドワーカーとして優れた才能を発揮されたのはご承知のとおりであるが、カメラマンとしての腕もなかなかのものであった。数年前、広島市立大学をお辞めになったのを機会に、四万枚以上のスライドを南山大学の人類学博物館に寄贈された。現在までに半分近くがデジタル化されており、近い将来の公開が期待される。

アンデス高地の牧民が、リャマのキャラバンによる交易の旅をするとき、一頭の雄のリャマが先導する。美しい刺繍が施された飾り布をつけ、胸に鐘をつけたこのリャマは「デランテロ（先達）」とよばれる。我々は、長いあいだアンデスの民族学研究のデランテロであった友枝さんを失ったが、南山大学での友枝さん追悼集会に参加した全員が、これからもいっそう調査・研究に励むことをお誓いしたのであった。

ペルー研究者ルイス・ミリョネス氏を民博に迎えて記念写真におさまる友枝啓泰先生（右端）と筆者（左端）〈提供・加藤隆浩〉

多文化をささえる人びと

日本を差別のない、多民族・多文化共生社会に！

「外国人労働者」ということばには、日本人となんら変わらない喜怒哀楽をもった生活者のイメージはない。日本人と外国人とがどう協力しあって生きるかをさぐるRINKを訪ねた

藤井幸之助（ふじいこうのすけ）
神戸女学院大学非常勤講師
専門は、在日朝鮮人論・民族まつり／マダン研究。日朝関係史を若い世代に伝えるために、今年一〇月に『ある在日コリアン家族の物語――つないで、手と心と思い――絵と物語で読む在日一〇〇年史』（共編・アットワークス）を刊行した。

日本の入国管理局がみとめる外国人の在留資格は二七に細かく分かれているが、非熟練労働者の入国を認めていない。移民送り出しと受け入れの歴史は長いにもかかわらず、明確な移民政策はなく、外国人受け入れ政策も場当たり的であった。

二人の子連れで台湾に語学留学

現在、RINK事務局長を務める早崎直美さんは三代目だ。毎週水曜日に事務所に出る。予算がないので専従ではない。

直美さんは一九五一年に岐阜で生まれた。戦前期、近くで石灰の採掘に多くの朝鮮人が従事していたようだ。そのためか、子どものころから地域に暮らす外国人がなんとなく気になっていた。同級生に朝鮮人の親友がいたのがその一因であったかもしれない。

京都の大学に進学したが、専攻の文学より、外国人の入管問題に関心をもつようになった。とくに当時の華青闘（華僑青年闘争委員会）の人たちから影響を受けて二年で中退したあと就職し、労働組合で十数年活動した。しかし外国人問題は念頭からはなれず、それなら中国語を勉強しようと、仕事を辞め一九九〇年に二人の子どもを連れて台湾の台北に一年間留学した。

帰国後、とりあえずパートの仕事をはじめたが、外国人関連の支援活動への興味はずっとあった。ちょうどそんなとき、縁があってRINKとかかわるようになった。すでに一九八〇年代、カラバオの会（横浜）、アジアンフレンド（大阪）など各地で外国人支援の活動が増えはじめており、RINKも一九九〇年代に入って結成されていたのだ。

労働者送り出し国の在大阪領事館との懇談会も積極的におこなっている。写真は在大阪タイ王国総領事館での話し合い〈提供・RINK〉

連合大阪主催「外国人労働者なんでも相談ダイヤル」〈提供・RINK〉

問題があるのに「ほっとけない」

早崎さんは毎年、連合大阪主催の「外国人労働者なんでも相談ダイヤル」をコーディネートしている。今年は六四件の相談（労働・社会保障・在留資格・家族の順で多い）が寄せられた。大阪を中心に、東北、関東、中部、東海、近畿、四国、九州の一五都府県にわたった。

日本人の心のなかには「外国人は別」という考え方があるようだ。なにかトラブルがあったり、外国人が権利を主張すると排除しようとしたりする。だから寄せられる相談は深刻で、決して楽しいものではない。

早崎さんはいう。「しかし、少し前に外国人労働者に起こっていたことが、民族・国籍の垣根を越えて、日本人労働者にも非正規雇用の増加、派遣切りのようなかたちでどんどん起こってきています。普通に考えておかしいことはほっとけません」。

知らないうちに本人の携帯番号が口コミで外国人のあいだに広まって、時間外に相談を受けることも多い。「インフォメーションで終わらない相談を心がけて、最後までお付き合いさせてもらっています。解決のプロセスのなかでこちらが学ぶことがいっぱいあっておもしろいんです」。

日本人主導から当事者本位に

「差別なく共に生きるための異文化交流」をテーマに、RINK発足の一九九一年から「マイ・マイ・フェスティバル」（Migrant and Minorities Festival）を開いてきた。外国人労働者の存在と課題について、文化を通して知る場として、画期的な取り組みだった。二〇〇七年まで一六回おこなわれたが、スタッフの減少、マンネリ化、かさんだ赤字のため、二〇〇八年は中止となった。

今年も再開できなかったが、それに代わるものが現れた。「異文化交流FESTA in 天保山」だ。在日ブラジル人が中心になって企画・運営して、今年一〇月二五日に開かれた。夜通しでやりたいというブラジル人たちに、まずは昼間だけやってみようとセーブをかけた。他の協力団体とともに今回はサポートする側に回る。

あなたの力を貸してください

この夏、「出入国管理及び難民認定法」、「日本国との平和条約に基づき日本の国籍を離脱した者等の出入国管理に関する特例法」、「住民基本台帳法」の改定案が衆・参両院で可決された。これによって、七月一五日の公布日から三年以内に、外国人登録制度に代わる「新たな在留管理制度」、「外国人住民票制度」が実施される。当事者の事情より、日本社会にとって有益な外国人だけを選別する制度になりそうな気配だ。「まるで外国人は『害国人』のような扱い。こんな意識の問題点を理解してもらうのがなぜこんなにも大変なのか。外国人と対等な関係をどうすればつくれるのか？　日々の業務のなかでつきつけられています」。

問題は多様化・複雑化していて、国際人権規約などの国際的な人権基準をこの日本で当たり前にすることが当面の目標だ。ボランティアの募集は随時おこなっている。通訳、翻訳などの言語能力や相談のさいに専門知識の必要な仕事のほかに、さまざまな仕事がある。

「一緒にやっていくという発想があれば誰にでもできます。若い人も若くない人も、あなたの力を貸してください」とよびかける直美さんのメッセージには重みがあった。

RINK事務所で電話相談を受ける早崎直美さん

RINK
すべての外国人労働者とその家族の人権を守る関西ネットワーク

RINKは、Rights of Immigrants Network in Kansai の略。日本語の発音が同じ英語のlink「つながり」の意味もかけている。

「差別のない、多民族・多文化共生社会の実現を！」をキャッチフレーズに、外国人の人権に関心をもつ市民団体や弁護士、労働組合、医療関係者、民族団体などが共通の課題に協力して取り組むことや情報交流を目的とするネットワーク組織で、1991年12月に結成された。現在の会員は約150人の個人と30団体で、会費と寄付金で運営されている。

RINKの活動は次の3点が柱となっている。

①外国人（労働者）問題に取り組む個人と諸団体の経験交流・情報交換と研究活動。
②RINKを構成する個人・諸団体がおこなっている具体的な人権活動への共同支援。
③行政機関や企業団体への、外国人の人権保障に向けた各種制度の改革要求や提言。

http://www.geocities.co.jp/kansai_immigrant_rights/

「マイ・マイ・フェスティバル」（2006年10月）でもちつきをする参加者

大阪国際交流センターでのイベントにブースを出展〈提供・RINK〉

生きもの博物誌

イヌイットの暮らしを支える

〈ワモンアザラシ〉

地球温暖化の影響をもっともうけているのが北極海に棲む動物たちかもしれない。体を休め、繁殖する場を失ったのでは、アザラシもイヌイットもともに救われない

捕獲したワモンアザラシ〈写真はすべてケベック州アクリヴィク村〉

岸上伸啓（きしがみ のぶひろ）
民博 先端人類科学研究部

カナダ・イヌイットを中心に北方先住民文化の研究をはじめて二五年。現在はアラスカのイヌピアックの捕鯨文化を研究中。著書に『イヌイット』（中公新書）などがある。

現在のイヌイット文化は、紀元後一〇〇〇年ごろにアラスカの沿岸で発生し、極北地域全域にひろがった捕鯨を経済基盤とするチューレ文化に由来する。

一七世紀ごろに寒冷化がピークに達し、ホッキョククジラの数が少なくなると、人びとは地元の陸獣や小型の海獣を食料資源とせざるをえなくなった。ほぼ一年中、捕獲できるワモンアザラシ（以下、アザラシと略称）は、そのなかでもっとも重要な食料資源のひとつであった。

アザラシの捕獲と利用

現在のアザラシ猟には、夏から秋にかけての海上でボートを利用した捕獲や冬の海氷上に形成された呼吸穴を利用した捕獲、春の海氷上でうたた寝をしているアザラシの捕獲などがある。春や夏の狩猟は比較的容易だが、零下三〇度以下になる冬に呼吸穴にやってくるアザラシを何時間もじっと待ち続ける狩猟は、忍耐を必要とする。

アザラシの肉と脂肪はイヌイットの中心的な食料であるとともに、その毛皮は靴や手袋の素材となる。

世界観におけるアザラシとイヌイットの関係

アザラシはみずからの意思で捕獲されるため、獲物を無駄にすることなく、ほかの人びとと分かち合いながら利用しなければならない、とイヌイットは考えている。また、捕獲したのちにアザラシに真水を飲ませるなど儀礼をして、その魂をカミの世界に送りかえせば、その魂はアザラシの姿をとって同じハンターのもとに戻ってくる、と信じている。

このように、イヌイットはアザラシを捕殺し、食べるが、そのアザラシを儀礼によって再生させるため、両者は互恵的な関係にある。

金収入源としての毛皮の取引

一九六〇年ごろにノルウェーで毛皮のあらたな加工技術が開発されたので、アザラシの毛皮は高級毛皮服の素材として取引されるようになった。定住生活をはじめ、現金を必要としていた当時のイヌイットにとって、石製彫刻や版画製作とともに、アザラシの毛皮の取引は貴重な収入源となった。

とくにアザラシの肉と脂肪は分配しながら食べ、毛皮を売り、現金を得ることができた。その現金でガソリンやライフルの銃弾を購入し、アザラシ猟を続けたのである。

アザラシをめぐる変化

ところが、一九八三年にヨーロッパ共同体が、動物愛護運動の影響を受けて、アザラシの輸出入を禁止したために、毛皮市場は崩壊してしまった。イヌイットはアザラシの毛皮の取引から現金を得ることができなくなり、ハンターは、かつてのようには狩猟に行くことができず、食料不足に陥ることもあった。

さらに一九八〇年代から温暖化のためにアザラシの生息域が狭くなって、総数が減少しつつある。しかも、イヌイットの若者のなかには、村外から輸送されてくる加工食品を好んで食べ、狩猟にあまり従事しない者も出現している。

このようにアザラシをめぐる状況は、この五〇年間でおおきく変わった。今や、アザラシに多面的に依存していたイヌイットの生活は、急激に変化しつつある。

冬のアザラシ猟。海氷上に形成された呼吸穴にやってくるアザラシを待つハンター。数時間待っても1頭も出現しないことがある

ワモンアザラシ
Phoca hispida 英名 *Ringed seal*

新生児は白い産毛に覆われて真っ白だが、成長すると濃い灰色の背中に明るい色の丸い模様をもつ。別名、フイリアザラシ。

北極海やベーリング海、オホーツク海に生息する哺乳類で、ホッキョクタラや甲殻類をおもな食料としている。オスは体長約125～150㎝、体重65～95kgで、メスは体長約115～140㎝、体重40~80kg。生息数は600万頭と推定。海洋汚染や温暖化の影響でその総数は減少しつつある。

アザラシを分配するハンター

アザラシの解体

アザラシを食べる人びと。近所の人たちが集まり、捕獲したアザラシを食べているところ

歳時世相篇 21

綿畑の草取りと湯泉
真夏のオーストラリアから

日本で冬将軍の足音が聞こえてくるころ、南半球のオーストラリアは夏真っ盛り。この時期、朝早くから広大な綿花畑の雑草取りに励むのは先住民ガミラロイの子孫たち。狩猟採集をしていた先祖と違い、森を失った彼らは季節労働者。歴史は流れるが、夏は毎年やってくる

松山利夫（まつやま としお）
民博 民族文化研究部
専門は文化人類学。オーストラリア先住民研究。近著に『ブラックフェラウェイ オーストラリア先住民アボリジナルの選択』（御茶の水書房）がある。

オーストラリアの南東部、シドニーから大分水嶺山脈を西に越えたニューサウスウェールズ州の北西部には広大な平原がひろがっている。北西平原とよばれるその土地は、アボリジナルのひとつの集団ガミラロイの領域であった。

森におおわれていたこの平原がヨーロッパ人によって植民されたのは、ボタニー湾に移民第一次船団が到着した一七八八年から数えてわずか五〇年ほど後の、一八三〇年代末のことだった。

森を失うことで得た仕事

入植者は森をきりひらき、まず牧牛を林間に放牧しつつさらに開墾をすすめていった。牧草地がひろがると羊を導入して牧場の経営を展開していく。その間に狩猟採集の場を失ったガミラロイは生活に困窮し病を患い、人口を減少させてしまった。

いま、この平原には農牧業生産品の集散地である地方町モリーが位置する。人口一万ほどの小さな町が取り扱う出荷量は、年額で二億オーストラリアドルに達している。

その中心をなすのが、いまや小麦と綿花である。とくに一九六〇年代になってから、牧草地や小麦畑の再開墾によって生産量を急増させてきたのが綿花である。繊維が長くて良質だというその栽培には、機械化された小麦などとは違って多くの労働量が投下される。綿花栽培も種まきと綿（種実）の収穫は機械化されているが、除草は人手だけが頼りである。

かつて除草剤を用いたこともあったが、空気や河川の水などの汚染がひどくてとりやめになった。それにオーガニックであることは、製品となったコットンに付加価値をもたらすからでもある。

働くのは五時半から二時まで

九月の終わりから一〇月にかけて播いた種が発芽し成長しはじめる一一月は、第一回目の除草の時期である。ついで一二月には夏の乾燥に備えて灌漑をおこなうために、綿畑には再び雑草が生い茂る。それは綿をのみこむほどの勢いである。そのあと状況によってはもういちど除草をして三月の収穫に備える。鍬を用いて手作業でおこなう綿畑の除草は、完全な季節労働である。しかもそれは夏の作業である。

北西平原はいま夏をむかえた。痛いほど暑い真夏の太陽のもと、さえぎるもののない綿畑で今日も除草作業がつづいている。

この過酷な労働に従事するのは、モリーの街区から数百メートル離れて設けられた集住地に暮らすガミラロイの子孫たち以外にはいない。「アボリジナルだからできる仕事」と彼らは自嘲的にいう。

作業は早朝の五時三〇分にはじまる。たとえば五〇〇メートル四方の畑で二回目の夏の除草の場合、男女あわせて九人が一一時まで休みなく作業を継続する。畦に生えた雑草だけを、綿を傷めずに鍬で取り除き畦のあいだの溝に落としていく。それから軽い昼食と休憩を三〇分ばかりとり、再び二時近くまで作業をつづけていた。この時刻になると取り除いた草を集めて処分し除草をおえる。これ以降は暑くなりすぎて作業ができないからである。

この日は五〇〇メートル四方の畑を時間内に終了できた。労賃は一人一日あたり七〇～九〇オーストラリアドル（約七〇〇〇～一〇〇〇円未満）にすぎない。労働の割には安い賃金だが、モリーの町に住むガミラロイたちには、綿畑の除草のほかにはこれといって実入りのいい仕事はない。

除草チームは年長者が組織し同時に作業のリーダーになる。メンバーのほとんどは親族や近隣の住人である。リーダーは特定の農場とのつながりをもとに仕事をもらい、作業にあたる。季節が限られたこの仕事をとるには、他のチームとの競争に勝たねばならないのである。

除草作業をするガミラロイの人たち。話好きの彼らも、このときばかりは黙々と作業に励んでいた

疲れを癒す掛け流しの温泉

仕事を終えると午睡を楽しみ、ときに街区の東南部にある町営の温泉で疲れを癒す。この温泉は、北西平原の開拓が軌道にのりはじめた一九世紀末に、牧草地と小麦畑の灌漑用につくられた深さ八五〇メートルの掘り抜き井戸から湧出した。三本のパイプからプールにとうとうと注がれる水温四〇度ほどの文字どおりの掛け流しの温泉は、アボリジナルの季節労働者をはじめとする低所得者層の憩いの場になっている。

しかし、ここがガミラロイたちに解放されたのは、一九六五年以後のことだった。当時、シドニー大学のアボリジナル学生だったチャールズ・パーキンスは、北西平原に点在する地方町を順に訪問し、それぞれの町でのアボリジナル差別を告発する学生の運動を組織した。モリーの町にやってきた彼らは温泉プールをめぐる差別に抗議してピケを張るなどし、警察の排除に抵抗して、ガミラロイたちの利用を町当局に認めさせたのだった。

こうした経緯をもつこの温泉プールは、北西平原に暮らすガミラロイにとってひとつのシンボル的な存在であり、同時に綿花畑の過酷な労働の疲れを癒してくれる憩いの場でもある。そのプールも季節労働も、この平原を流れた二〇〇年を超える時の産物なのである。

今年もまた北西平原には草取りの季節がやってきた。

フィールドで考える

滑るようには、歩けない！

ジャムーはジャワ島で民間伝承されてきた天然生薬系の健康増進ドリンク。東ジャワ州マラン県で商売をするジャムー売りのスキさんに頼み込んで、いっしょに行商をさせてもらった。二カ月間ジャムー売りになって、いろいろなことがわかってきた

間瀬（ませ）朋子（ともこ）
上智大学アジア文化研究所客員所員
ジャワ特定地方からの出かせぎモノ売りを調査中。社会変化の大波小波に翻弄される弱い存在ではなく、たくましく、たおやかに生きているのがモノ売りの大半であると考えている。

肩から斜め掛けにした長い縞布（しまぬの）で竹籠を背負って、行商をする女たちがいる。右手には、水の入った小さなバケツを提げる。クバヤ（ジャワの伝統的上衣）にサロン（腰巻き布）の装いのことも多い。

ジャムー売りのスキさん

彼女たちの竹籠には、ミネラルウォーターやサラダオイルのプラスティック容器に黄色、白色、緑色、黒色などの液体を詰めたものが一〇本ほど入っている。容器の液体は、ジャムー。その主原料は、ウコン（クニル）、バンウコン（クンチュル）、クスリウコン（トゥム・ラワッ）、オオバンガジュツ（クンチ）などのショウガ科植物、キンマの葉、タマリンド（アサム）などである。オレンジがかった黄色はクニル・アサム、白色はブラス・クンチュル、緑色はクンチ・ソロなど、色の違いは材料の違いであり、味や効能も違う。

スキさんの後ろを ヨタ ヨタと

竹籠を背に、女たちは軽やかに、滑るように優雅に歩く。籠の中身が三〇キログラムもあるとは、想像しにくい。

スキさんの行商に同行するに際し、わたしも竹籠を背負ってみようとしたが、籠は背中まで持ち上がらない。彼女の助けを借り、なんとか背中に籠をくくりつけても、そのまま後ろにひっくり返りそうである。そこで、スキさんが右手の小さなバケツとともに、いつも左手に提げている黄色の籠を、わたしが持つことになった。

その籠の中身は、業務用サラダオイルの五リットル容器に詰められたクニル・アサムと、小さめのミネラルウォーターの容器数本に詰められたブラス・クンチュルである。黄色の籠を右手に提げたわたしは、容器の中でジャムーがたぷたぷと音を立てるのを聞きながら、ヨタヨタとスキさんの後ろを歩く。

わたしが提げる籠の重さは、スキさんが背負う籠の四分の一ほどだが、ずっしりと腕に堪え、歩く姿は、滑るような優雅さからはほど遠い。

そんなこと、よく知らない！

ジャムー売りという商売を知りたくて、黄色の籠を持つ手を右に左に何度も変えながら、路地裏を行商中のスキさんに話しかける。朝六時から正午までのたっぷり六時間、道々のおしゃべりは止まらない。

一〇時を過ぎ、お互いの籠が軽くなってくると、ますます舌は滑らかになる。何種類のジャムーを売るか、どのようにジャムーを作るか、一日何リットルのジャムーを売って、どのくらいの売り上げになるか。スキさんは、「間違っているかもしれないけど」、「だいたいよ」と言い足しながら、とくに隠し立てもせずに答える。

他方、一日の客数、仕入れの量と額、信用売りをした客数、どの地点で何時間商売するか、客との関係性などについては、「そんなこと、よく知らない」と素っ気ない。確かに、何リットルのジャムーが売れたかはボトルの数からわかっても、それを何人に売ったかは、スキさんは数えないから、わからない。

わたしは、それを数えた。信用売りをした客数や、どこで何分立ち止まって商売したかなどを数えたり、記録したりした。

ジャムー売り

商売をするスキさん

スキさんとわたしの心の距離

スキさんとの行商をはじめた最初の三日間、彼女の顧客は全員、バケツに入れたコップでジャムーを飲みながら、「この子だれ？」とわたしのことを尋ねた。内心、なぜわたしにつきまとわれるのか自分も納得していなかったであろうに、「日本人で、ジャムー売りが好きなのよ」と、スキさんはあちこちで繰り返し説明した。

「ジャムー売りが好きだから、いっしょに行商をする」という論理がどのように路地裏で理解されたのかわからない。しかし、パンダも三回見れば珍しくなくなるのと同様、四日目からわたしを不思議そうに眺める人は格段に減った。一週間後の路地裏において、わたしは完全にスキさんの補助役としてあつかわれるようになった。

すると今度は、わたしとの距離を考えてきたはずのスキさん自身に、より積極的にわたしを受容しようとする変化が生じた。

「その黄色の籠、重いよ。あんたは、バケツを持てばいい」、「スイカを二切れ買ったの。食べたら？」と、行商中、スキさんはつねにわたしを気遣う。籠が重くてたいへんなのは彼女のほうであるし、商売の邪魔でしかないわたしは、途中、彼女にアイスクリームでもご馳走するのが、しかるべき態度だったかもしれない。

さりげない優しさと「答えたくないから答えない」ことはあまりないが、「答えられないから答えない」ときは往々にあるという率直さとが、いつもスキさんの全身から漂っていた。

ジャムー売りのレリーフ

スキさんの出身村〈撮影・ギト・ニルボヨ〉

「見える？　大通りの向こう側から歩いてくるジャムー売り、あれはわたしの従姉妹」、「市場の前に出ている鶏そば屋台は、わたしの義弟」、「わたしの出身地、ソロ地方からは、たくさん出かせぎが出るの」。ジャムーを売り歩きながらスキさんから聞いた話の一つひとつが、わたしの研究の糸口になった。

＊

彼女を起点にジャムー売りを中心とする出かせぎモノ売り集団を追いかけて、約八年。その集団の規模、地域的広がり、出かせぎ史などが具体的にわかってきたほか、集団全体に彼女と同じ空気がそこはかとなく漂っていることに気づいた。

その空気の心地よさに、わたしは彼らのそばを離れられない。これからも彼らに観察されながら、わたしは彼らを観察しつづけるであろう。

編集後記

私はインターネットや雑誌の星座占いにときたま目を通すくらいで、本格的な占い師のお世話になったことはない。信じないというわけではなく、そういう場所にわざわざ出かけて行く手間が面倒なのだと思う。

ただ、一度だけ、学生時代に韓国旅行をした際に、好奇心からシャーマンに手相をみてもらったことがある。将来は、「美術関係」か「先生」だと言われた。いまや博物館で働き、「先生」と呼ばれる身分になった。あたらずといえども遠からず。

「息子が二人生まれて、彼らは有名になる」とも言われたが、いまや娘一人、息子一人がいる。有名になろうが、なるまいが、占いの言葉にすがらず、運命は自分の手で切り開く大人になってほしい。

ところで、今号の編集会議当日、朝刊でレヴィ=ストロースの訃報を読んだ。101歳の誕生日を目前にしての大往生である。昨年11月号に、その偉業と民博とのつながりをふりかえった特集を小誌でも組んだが、生きながらにして、すでに運勢など超越してしまった聖域に達しておられる観があった。巨星墜つ。（山中由里子）

次号の予告

特集 **トラ**

月刊みんぱく
2009年12月号
第33巻第12号通巻第387号　2009年12月1日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話　06-6876-2151

発行人　西尾哲夫
編集委員　久保正敏（編集長）　佐々木史郎　庄司博史
中牧弘允　信田敏宏　山中由里子
協力　財団法人 千里文化財団
制作　京都通信社
印刷　市蔵図書

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館企画連携係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

●予定時間　14時30分から15時30分（予定）。
★12月6日（日）は、11時から12時（予定）。
●常設展示場観覧料が必要です。
＊都合により、予定を変更することもあります。

国立民族学博物館（みんぱく）の研究者が、来館された皆様の前に登場します！
「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」などなど、話題や内容は千差万別！
どんどん質問もおよせください。展示場でお待ちしています。

12月の開催

12月6日（日）
★この日のみ11時から12時（予定）
話者：中牧弘允（民族文化研究部教授）
話題：カレンダーをめぐり、めくるツアー
場所：アメリカ展示

アンデスの暦。12か月の行事を紹介するもので日付を知るものではない

12月13日（日）
話者：福岡正太（文化資源研究センター准教授）
話題：世界の太鼓―音楽展示新構築に向けて
場所：展示場内休憩所

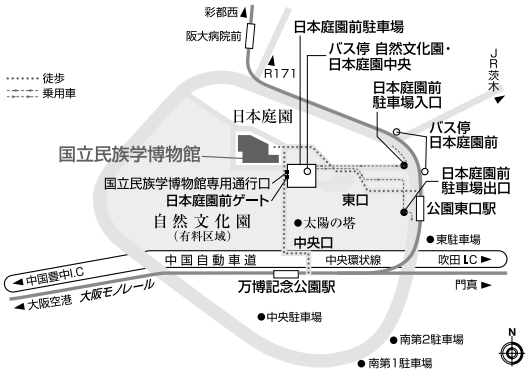
12月20日（日）
話者：鈴木七美（先端人類科学研究部教授）
話題：アメリカの〈懐かしの味〉の物語
場所：常設展示場内

12月27日（日）
話者：岩佐光広（研究戦略センター機関研究員）
話題：老×老：ラオス低地農村部で「老いる」こと
場所：展示場内休憩所

1年間みんぱくに何度でも入館できる
「みんぱくフリーパス（3,000円）」をご利用ください。
常設展は何度でも無料で入館できます。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

特典◆常設展の無料入館◆特別展の観覧料割引
◆みんぱくミュージアム・ショップとレストランの10%割引
◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引　など。

詳細については、財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
（電話06−6877−8893／平日9：00〜17：00）



交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分
●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分（茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください）。
●自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ
http://www.minpaku.ac.jp/